

### 広島大学・広島県・アツガイ合同会社 肝炎撲滅に向けて協定を締結



広島大学は7月18日、広島県・アツガイ合同会社と肝炎撲滅に向けて、県民の肝炎対策の推進に係る連携に関する協定を締結した。

同社は、平成16年に「肝臓・消化器研究拠点」を設置し、茶山一彰教授、大段秀樹教授、田中紳子教授を中心に、肝炎患者に対する新規治療の開発、国内外における肝炎・肝がんに関する疫学データ解析、専門人材の育成などに取り組む。肝炎研究・治療の拠点づくりを進めている。

協定により、肝がんの主な原因であるB型肝炎・C型肝炎ウイルスによる肝炎の早期発見・早期治療を更に推進するため、広島県研究機関であり肝炎治療の中心的役割を担う同大、肝炎撲滅に向けた社会貢献活動に尽力する製薬企業である同社の三者がスクラムを組み、肝炎対策に係る相互協力を目的とした連携協定を締結し、県民の健康寿命の延伸を協定書にしている。

### 広島大学

平成30年7月  
豪雨災害調査団 最終報告会実施

広島大学は7月5日、同平成30年7月豪雨災害調査団の最終報告会を東千田キャンパスで開催した。

豪雨災害調査団では、学内の防災研究分野の専門家の力を集結して、土石流・斜面災害・水文気象・洪水・氾濫、生活インフラ被害、公衆衛生・災害医療の4つの班を構成し、専門的地域から調査を進めてきた。調査団の調査結果のひととして、これまでにこの度の災害は、土石流や洪水氾濫などが複合的に発生し、広域かつ深刻な被害をもたらす従来なかつたタイプの災害、すなわち「相兼型豪雨災害」であることが明らかになっている。

報告会では、最初に、副団長の藤原章正教授(大学院国際協力研究科教授/生活インフラ被害班長)から豪雨災害調査団の1年間の活動の総括を行った後、土石流・斜面災害班は、土壌防災・減災研究センター長と海堀正博総合科学研究科教授、水文気象・洪水・氾濫班は河原久工学研究科教授/理事・副学長、生活インフラ被害班は塚井誠人工学研究所准教授から、公衆衛生・医療班は大毛宏

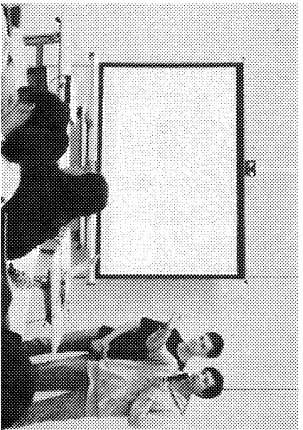


団長は、被災直後の平成30年7月11日から、越智学長を団長として活動。豪雨災害から1年を迎え、同報告会を最後に解散し、そ

### 広島大短期交換留学プログラム 留学生による最終発表会

広島大学短期交換留学プログラム(HUS A)留学生(北米・ヨーロッパ・オセアニア・アジア出身)が7月10日、東広島キャンパスの学生ラウンジにて「グローバル・リターンシップ・プロジェクト: 適応と再適応」実証研究学生の自助支援: 適応と再適応」実証研究プロジェクト最終発表会を開催した。

17カ国41大学からの交換留学生53人が参加するHUS Aプログラムで8グループを構成し、HUS A担当の恒松直美(森戸国際高等教育学院准教授)による英語と日本語の司会・進行のもと実践プロジェクトの最終発表を行った。留学生の自助支援プロジェクトの一環として同大における適応支援への提案と帰国後自国の大学における再適応支援について調査報告をした。



留学生発表会は、地域公開として、学内開催され、学生・日本人学生・地域行政関係者からフットパッドプログラムがあり、多くの発表者から多くの発表を得ていた。